ムッラー・ビラールの『聖戦記』について

浜田正美

ここに紹介するムッラー・ビラール Mullā Bilāl のキタービ・ガザート・ダル・ムルキ・チーン Kitāb-i ġazāt dar mulk-i čīn 中国に対する聖戦の書（以下『聖戦記』と仮称）は、一八七六年に書かれた、一八六四年より一八七一年の間の、イリ地方の事件を記した韻文の作品である。一八六四年はすなわち、ドゥンガン（漢回）・ウイグルの反乱が新疆全域で勃発した年であり、一八七一年は、コーカンドから入って南路をほぼ平定し、英国との結びつきを強めていたヤクーブ・ベク Ya'qūb Bek の、北路への進出を恐れたロシアが、イリ地方を武力占領した年である。

十七世紀以来、東トルキスタンのウイグル人は、チャガタイ語を文化的共通語として用い、彼らの文学・歴史を記述していた。殊に、一八六四年の反乱に始まる一九世紀後半の動乱の時代については、ウイグル人の手になる相当多数の文献が残されている。ウルムチの新疆博物館に所蔵される写本の全貌が、まだ明らかにされていないので、確実なことは言えぬが、それでも現在までに筆者が知り得たところでは、ペルシャ語のものも含めると、およそ二

十点のこの種の文献が存在する。しかし、そのうちで現在までに出版されたものは五指に満たない。

『聖戦記』は、セミレチエ州の官吏であり、中央アジアの民俗学歴史地理学等の研究者であったH・H・パーントゥソフ Пантусов（一八四九—一九〇九）により、Бойна мусьман против китайцев というロシア語の題をつけて、一八八〇—八一年にカザンで出版された。その第一分冊にはテクスト、第二分冊にはテクストの訂正表と注記、及びタランチ（イリ地方で強制的に農業に従事させられていたウイグル人、清朝支配下のタランチについては、佐口透「タランチ人の社会——イリ谿谷のウイグル部落史、一七六〇—一八六〇」史学雑誌七三編十一号、に詳しい。）の俚謡が収められている。このパーントゥソフの出版のお蔭で、『聖戦記』の存在は早くから学界に知られていたが、その内容について具体的に研究されたことは、全くといってよいほどなかった。筆者が見ることが出来た、『聖戦記』及び作者のムッラー・ビラールについての研究は、幾分かでも言及するところのあるものを含めても、以下の四点に過ぎない。

Hamrajev. M., Bilal Nazim, ein Klassiker der uigurischen Literatur. UAJb. 42. 1970. S.77–99

Кайдаров, А.Т., Развитие современного уйгурского литературного языка. Алма-ата. 1969.

Ибрагимова, Т.М., Краткая характеристика некотрых источников о маньчжурских завоеваниях. Ученые Записки Института Востоковедения. T. XVI. 1958. cTp. 404–424.

光天「略談維吾爾族的古典文学」光明日報、一九五六年七月十三日。

（なお、パーントゥソフ自身による訳稿が存在したらしい。（Дьяков, А., Воспоминания илийского сибинца

о Дунганско-таранчинском восстании в 1864-1871 годах в Илийском крае. ЗВОИРАО. том. 18. 二三六頁）しかし、これが出版された形跡はない）従って、筆者の知る限りでは、本稿は『聖戦記』の内容を具体的に紹介する、おそらくは最初の論文となるはずである。

なお、原文をトランスクライブするに際しては、Eckmann, J., Chagatay manual, The Hague, 1969 の方式に従った。語学的知識、とりわけ韻文に関するそれの不足の為の誤りの多からんことを恐れ、引用文については、筆者の試みたトランスクリプションを出来る限り示すので、読者諸氏が問題点を指摘して下さるよう期待する。

著者ムッラー・ビラールの生涯については、彼の残した作品がほぼ唯一の史料である。現在知られているところでは、彼には『聖戦記』の外に、一八二五年のジハーンギール・ホージャの反乱の際、清朝に反抗し、終には処刑された、ウイグル人女性を主人公にした『ナズグム Nazugum』、一八四二年頃イリ地方で実際に起った、ホージャを自称する怪しげな人物にまつわる事件についての『チャンムザ・ユスフ・ハン Čangmuza Yūsuf Ḫān』、及び凡そ百編の頌 gazal からなる ġazaliyyāt すなわち『詩集』がある。このうち彼の伝記史料としての価値を持つのは、『聖戦記』と『詩集』である。カイダーロフ氏は、一九六一年にアルマ・アタで、C・モッラーウドフ Моллаудов 氏の編集により、ビラールの『選集』(Tallanġan äsärlär) が出版され、それには多くのガザルが含まれていると伝えているが(三三頁)、いささか奇妙なことには、ビラールに関する唯一の専論の筆者であるハムラーイェフ氏（彼もアルマ・アタ在住の人である）は、この『選集』については全く触れていない。いづれにしても、

ビラールのガザルについては、我々は今のところ、ハムラーイェフ氏によるごく僅かのドイツ語訳を知るのみである。

ビラールの生年は、彼に実際にグルジャで会ったパーントゥソフの伝えるところ（『聖戦記』に付した彼の序文）や、ビラール自身がガザルにうたうところ（ハムラーイェフ、七八頁）からして、ほぼ確実に一八二四年である。ロシアのイリ占領中、彼はグルジャの一回教寺院でイマームの職にあったが、後一八九五年、ロシア領のセミレチエ州へ移住し、一八九九年、ジャルケント Джаркент、現在の名ではパンフィーロフ Панфиров という、中ソ国境から遠からぬ町で死んだ（カイダーロフ、五四頁）。彼の父の名をパーントゥソフはムッラー・ユースフ Mullā Yūsuf と伝えるが、ハムラーイェフ氏は彼を、小商人で靴屋であったが、文字を良く知っていた人物であったとしている（七九頁）。これは、当時の東トルキスタンでムッラーと呼ばれていたものが、実際どのような社会層に属するものであったかを示す好例であろう。彼の家系とその生涯の具体的なクロノロジーは、以上述べたことにつきる。

『聖戦記』の「告白について」という章で、ビラールは自分の生い立ちを以下のように語っている。

我自らは心貧しい者であった／心貧しい者とはつまり、心卑しい者であった。
若い頃には、悪い者たちと共に歩きまわり／酒場の中を若者たちと共に（歩きまわった。）
きれいな上着を着、きれいな手をし／神を恐れることを全く知らなかった。
かくの如くわが生は幾年かを過し／世人の内で、いかに卑しく軽蔑すべきものであったことか。
しかし、神は（我に）物書く（術を）知ることを贈り物とし給い／わが心は始めて自由になった。
時々に詩を作ることがわが仕事となり／友人たちと宴をすることがわが仕事（となった。）

それ故に、幾人かの友人に会った時には／彼らの友情は我に暖かかった。[1]（六頁）

神から与えられた「物書く術を知ること」とはすなわち、詩を作る能力のことである。ビラールは人々からナージム Nāẓim すなわち「詩人」と渾名され、自らも亦ムッラー・ビラール・ナージムと称していた程の、当時イリ地方第一の詩人であった。先の引用に始まる章の標題にいう。

告白について。不肖財なく、卑しく、才能なき詩人が、自らの言葉と友人たちが撒き散らした言葉を、詩の規則を以て集め置いた意義を説明すること。[2]（六頁）

彼が「詩の規則」に通じていたことは、この『聖戦記』自身が証明する。『聖戦記』の詩はマスナヴィー体、すなわち相互に押韻する二句を以て一連(bayt)を作り、これを連らねて行く型であり、韻律はムタカーリブ mutaqārib すなわち「短長長・短長長・短長長・短長」の十一音節からなる韻律を採っている。ビラールが最も好んでガザルに用いた韻律は、ラマル ramal であったと言うが（ハムラーイェフ、八五頁）、『聖戦記』の韻律にムタカーリブが選ばれたのは、このシャー・ナーメの韻律こそが、叙事詩には適しいと考えられた故かも知れぬ。これは、あながち根拠のない空想でもない。実際、ビラールは、ペルシャ・中央アジアトルコの伝統的文学に相当程度通じていた。ハムラーイェフ氏によれば、ビラールは若年の折、グルジャの学校でルーダキー、ニザーミー、アリー・シール・ナヴァーイー等の大詩人の作品を学んだというが（七九頁）、歴史詩である『聖戦記』にも、薔薇 gul と夜鶯鳥（ビラールはペルシャ語の bulbul よりアラブ語の ʻandalīb を好んで用いている）、或いはサーキー sāqī、すなわち酒の給仕をする美少年、といった類のペルシャ的イスラム世界の文学に伝統的な詩的イメージと結びついた言葉が頻出

する。サーキーについて例を上げると、「サーキーよ来い。酒と杯を持て／ビラールが味い飲んだなら、次々と持って来い。kel äy sāqiyā may bilä cām tut/ Bilāl tuyǵunča icsä häm yenä tut」（九頁）或いは「サーキーよ、喜びから杯を持って来い／この酒の力によって我語らん ketür sāqiyā cām masrūrīdin/ takallum qīlay ušbu may zōrīdin」（四九頁）の如くである。これらは、一つのエピソードの始めや終りに、本筋とはあまり関係なく挿入される、一種の常套句なのであるが、これを例えば、「フェルハードとシーリーン」に見えるナヴァーイーの句「サーキーよ、杯を持って来い／我賞味したならば、また持て kitür sāqī manga cām-ı fenā bir/ niçe kim anı sıpkarsam yana bir」（Agâh Sirri Levend, Ali Şir Nevaî. III Cilt. Ankara. 1967. 一九五頁）と比較するとき、その間の類似は明白であろう。これを、いわば「本歌取り」の関係と考えるのは、勿論乱暴であるが、ビラールがナヴァーイー等の文学に十分親しんでいたことの証拠ではある。新疆で収集され、現在ソ連邦科学アカデミー・東洋学研究所レニングラード支部に所蔵される写本のうちに十点以上ものナヴァーイーの作品の写本が含まれていることも付言しておこう。（Мутинов, М.А., Описание уйгурских рукописей Института Народов Азии. Москва. 1962.）

またビラールがシャー・ナーメに関する知識を有していたことも確実で、彼が古えの例しとして言及する王たちの名は、ジャムシード、カイ・カーウース、ザール、ルスタム等々、すべてシャー・ナーメの諸王の名である。

ビラールが用いた言語も亦、少くとも『聖戦記』に関する限り、古典的なものであった、カイダーロフ氏は、ビラールの作品には、現代ウイグル語（その基本はイリ方言である）の特徴である、語頭音 y の ž への変化が見られ

ると述べ（三三頁）、こうした民衆の口語への接近の故に、ビラールを評して、「ビラール・ナージムは、一方では前時代のウイグル古典の書写文学の伝統を発展させ、他方では民衆の豊富な口語詩を利用した。」（三六頁）といい、また「ビラール・ナージムは、単にウイグル文学の才能ある写実主義者の詩人であったのみならず、革命前の時期における新しいウイグル文語の民主的発展の創始者である」（三九頁）と述べている。しかし『聖戦記』に関する限り、事情は少しく異るように思われる。『聖戦記』ではpとfの混同（イリ方言ではf＞pとなって、発音上両者に区別がないため、元来pであったものまでがfと綴られることがある）は多く見られるが、y-＞ÿ-の変化は認められない。その他の現代ウイグル語的特徴としては、ただ僅かに二、三個所で、複数語尾-lar, -lär＞-la,-lä の変化が見られるだけである。特殊な語彙の問題を別にすれば、『聖戦記』の言語は、あくまで古典的なチャガタイ語を模倣していると考えられる。（筆者がトランスクリプションに、エックマン氏の方式を採用した理由はここにある。しかし、それはあくまでも書写語に限ってのことであって、例えば『聖戦記』が朗読された際に、一々の語がどのように発音されていたかは、又別個に考える必要がある。）

『聖戦記』執筆の理由を、ビラールは次のようにうたっている。

彼ら（友人たち）の一人にて名はアリー／多くの告白をして、このように言った。
おお詩人よ、わが言葉を聞き給え／我自らは汝の兄弟同様の者なれば。
イリの聖戦のことを詩に作り／バラ園の詩によって宴を為せば、

我らの名は世に残り／後世、我らの子孫は読むであろう。
読んで、我らの魂のために祈るであろう／その祈りを神は義とされるであろう。
我らからこの物語が記憶として残り／記録の書、わが言葉は果報を残すであろう。
殉教者たちの魂を喜ばせよ／聖戦のことを詩に作れ。(3)（六―七頁）

この様に勧められて、ビラールは初めは辞退するが、終に、

、多く（の辞退の弁）を言ったが、終に無益であった／（そこで）私は言った。天なる神のお導きが有るならば、私は作ろう。
私は言った。良きかな、賢き友よ／神の御助力が有るならば作ろう。
多くの人間と呼ばれるもののうちで、我は知恵なき者／このことを思って、わが顔色は青ざめた。(4)（七頁）

と述べて詩作に取り掛ることになるのである。ビラールは同様のことを、この外三個所程でも述べているが、そのうちコロフォンでは、韻文ではなく散文で、もっと簡単に以下のように言っている。

このノートを最初の二、三個月、アリー・バイが読み上げ、彼の言葉を某ムッラー・ビラール・ナージムが散文の体に書き、それから急ぎ韻文にして、聖戦を行なったムスリムたちの子孫に、記録の書として我らは残した。『中国に対する聖戦』と名付けた。……一二九五年に、イリの暦法でトラの年に、この写本は完成した。(5)（一七一頁）

以上の引用からして、『聖戦記』がアリーという人物の勧めによって書かれたこと、その執筆の目的が、イリの事

件を後世に伝えることと、「殉教者の魂を喜ばせる」ことにあったことが知られる。中でも「殉教者の魂を喜ばせる」というのは、『聖戦記』全体の構成上、重要なテーマになっている。すなわち、この叙事詩の末尾には、詩がすべて完成した後に、ビラールのスポンサーであったアリーが殉教者たちを夢に見、その夢をビラールが、殉教者の魂が喜んだ証しであると判じたというエピソードが付け加えられているのであるが、このエピソードは、冒頭の「殉教者の魂を喜ばせよ」と相照応して、いわばプロローグとエピローグとして、この叙事詩全体の構成を締め括っている。

『聖戦記に』おいて、ビラールは、個々の戦闘に参加した人物や、その際に戦死した人々の名を、いささか辟易する程に列挙しているが、このことは上記の二つの執筆の目的と無関係ではない。ビラールにはこの作品が、広く世に受け入れられることを望んでおり読者と同時に聴衆をも期待していた。「(この詩を)聞く人々は、退屈し給うな」(6)(八頁)という句は、詩の聴衆が存在したことを示している。ペルシャ的イスラム世界に広く存在する、宴席で詩を朗唱しあう習慣が、遠く天山山脈の北の地にまで広がっていたのであろう。ビラールは人々の集りで自分の詩が読まれ、聖戦に生き残った者は、かっての自分の勲功を思い出し、身内を戦死させたものは、悲しみを新たにするであろうことを期待していた。

悲しみを持つすべての人は、これ(詩)を聞くであろう/目から心の血を流すであろう。
或者の父は殉教し/或者たちの息子は殉教した。
或いは兄弟と別離した/生命よりも尊いはらからと。

（この詩を）聞けば、勇士も鋭く傷つき／傷つくどころか、むしろ粉々になるであろう。
祈願をこめて祈れかし／その祈りをわが神、義とされかし。
（そうすれば）殉教者たちの魂は皆喜び／祈りを為す者は、悲しみから解放されるであろう。[7]（十頁）

ムッラー・ビラールが『聖戦記』を書くにあたって、資料としたのは、彼自身の体験と他の人々からの伝聞である。

イリの要塞の雄弁家たち／雄弁家、すなわち明敏な教育ある人たち。
（彼らが）互いに為した物語／集りにおいて、為した話しはこうである。
これなる詩人は進み出て、言葉の真珠を並べ整え／その時、紙に描き取った。[8]（二七頁）

とか、「知恵ある人々からのこのような物語／それを私は飽くことなく聞いた」[9]（八頁）などという度々繰り返される句とともに、「これなるビラールは、この聖戦に多く赴き／見て、ノートに書き取った」[10]（九頁）とも、ビラールはうたっている。この句から知られるように、彼は心覚えのノートをつけていたらしく、「（詩の）機微を解する語り手は、（事件は）この様であると言った／私はその言葉をノートに書き留めた」[11]（十頁）という句もある、先に引用したコロフォンに、「このノートを……アリー・バイが読み」とあるノート daftar というのも、ビラールのこの心覚えのノートを指すのであろう。彼は熱心な記録者であったのである。そして更に、「この聖戦の原因が奈辺にあったか／これをわが物語のうちに語って我知らしめん」[12]（十頁）という彼の言葉からすれば、彼は単なる記録者ではなく、諸事件を因果の連鎖のうちに捕促し得る一個の歴史観の持ち主でもあった。

歴史書としての『聖戦記』の構成も亦極めて伝統的な形式に従っている。すなわち、「栄光の主たる神への讃歌」の章を以て始められ、ここでは天地創造と、アダム以下の諸々の予言者に対する神の御業が讃えられる。ついで、ムハンマッド及び彼の四人の教友、アブー・バクル、ウマル、ウスマーン、アリーへの頌辞が続く。その後、先に引用した「告白について」の章をはさんで、「要約。イリの城市が、いかなるハーンから、いかなるハーンへ伝えられたか。いかなるハーンの時代にこのグルジャが繁栄し、いかなるハーンの時に破壊されたか。その物語」[13]と題する、ビラール自身の時代に至るまでのイリの歴史の章が置かれる。以下少し引用してみよう。

語り手は、このように物語った／イリの城市は（元来）ヒッジャーズに属していた。
その後、幾人かのハーンが過ぎ去って／永遠の方へ皆流れ去ったと言う。
後、イリにクンタヂがシャーとなったが／何年かして、彼も亦（同じ）道を取った。
それからウムリサナに伝わり／彼を捕えようと、ハーン・ホージャムたちが来て、
イリの城市の六個所で衝突し／ウムリサナと闘った。
彼らも亦この世から去り／皆一人一人背後へと去った。
チェン・ルン（乾隆）というハーンの御代になって／イリの城市に多くの移住者が来た。
クチャとアクス、シャーヤール、バイから／ヤルカンド、カシュガル、ホタンの方から、
多くの人々がイリに移って来て／土地を耕して定住した。
その時から現在まで百余年／ハーカーンに多くの年月仕えた。

不信者はムスリムに不正、圧制を加え／大麦、小麦、トウモロコシ、貨幣を取った。
不信者たちの多くの圧制は限度を越え／多くの人々が、中国人から残虐な目に遇った。
（中国人は）断えず金銀を金持ちから取り／金持ちは貧乏人から取り上げた。
貧乏人たちは死をより好ましいと見た／兵士たちが、貧乏人を酷く鞭打った（が故に。）
中国人はこの地方で圧制を行い／（人々の）子供を売って、金を得ていた。
この不信者たちの誅求に耐えられず／農民は鞭打ちに耐えられず、
収入のために、良い息子たちを売った／生命より尊い心のきずなを。
農民は中国の圧制に耐えられず／ついに敵対し、実力に及んだ[14]（八—九頁）

引用中、クンタヂ qūngtāci は、ホンタイジ xongtayiji すなわちジュンガルの汗のことでありウムリサナ Umūrisanā は、アムルサナ Amursana である。ハーン・ホージャは、恐らくは、乾隆の東トルキスタン征服に功の有ったトゥルファンのエミーン・ホージャ Amīn Ḫvāca 額敏和卓のことであろう。イリのハーキム・ベクの職は、彼の子孫が世襲していた。

ビラールが、十分な同情と共感を以て、タランチ農民の悲惨な状態を描写していること、とりわけ、彼が「中国人は金持ちから取り、金持ちは貧乏人から取り上げ」るという、清朝とウイグル人ベク階級からなる二重の支配構造を認識していたことは、大いに注目に値する。恐らくは、こうしたことの故に、ソ連の学者たちは、ビラールを極めて「進歩的、民主的」な人物と評価し、例えばイブラーギモヴァ女史は、彼は「多くの場合、自らの属してい

た封建領主階級の限界性を克服し得た」（四一五頁）と主張している。しかしながら、先にも述べたが、ハムラーイェフ氏の言う如く、ビラールが小商人で靴屋であった人物の息子なら、彼はそもそも封建領主階級に属してなぞいなかったのであるし、もし仮りにそうだとしても、『聖戦記』には以下の如き章句があって、反乱の結果生じた、貧乏人が金持ちになるという社会変動を、ビラールが苦々しく眺めていたことが知られる。

幸福な金持ちたちが、貧乏人の如くになり／（一方）貧乏人たちは駿馬に乗っている。
（かつて）貧乏人はウイキョウの茶（さえ）飲めず／アマニ油を食することは出来なかった。
（しかし）今日では、馬頭茶を飲み／驢馬にも乗れなかった者たちが、若駒に乗っている。
金持ちの息子の多くは貧しくなり／貧乏人の牛は、今日では多い。
貧乏人たちは牛乳を飲み、クリームを食べ／高貴な者たちが、常に乾し果物のパンを食べた。
悲しい哉、悲しい哉、純粋さは失われ／兄弟の間での誠実は失われた。
若者たちは女のように柄物を着／長上の者たちは、腰に縄を巻いている。
悪しき家柄、悪しき人が貴顕となり／立派な人々は、大方皆去ってしまった。[16]（一三九頁）

イブラーギモヴァ女史は更に、ビラールは「真の楽天主義者であり、人民のためのより良い生活についての思想は、彼から離れることがなかった。彼は、自分の祖国が苦しい圧制から脱する時が来ることを、念願し信じていた」（四一五—四一六頁）とも述べて、「Не плачьте, люди, выпавшее нам на долготоре устранится, 泣くな、人々よ、我々に与えられた不幸は遠ざかる」という句を引用している。しかし、女史はここで二重の（厳密に言うな

ら三重の）誤りを犯している。すなわち、この句は（女史が引用している、他の一句も）Война мусульман против китайцев の第二分冊のタランチの俚謡の中に見える句であって、ビラールの詩ではない。（女史は、引用のページを八頁としているが、これも十五頁の誤り。）更に、この句を女史が言うが如く、楽天的な気分を表したものと解することには、甚だ無理がある。この歌の全文を紹介しよう。

トクズ・タラ、トクズ・タラ、人々の溜息は頭を砕く。
ムスリムよ、その運命を泣くな。下されたもの（つまり、運命）は、至るのだ。
トクズ・タラ、タラとはいうが、谿谷(tara)ではなく、平原(tala)だ。
泣き止まそうにも術はない。不幸が頭上に下されたのだ。
天は覆われ、霧と砂嵐が出た。
私の夢に、わが父母が現れた。
そこをトクズ・タラというが、河岸ではなくて、平らな原だ。
トクズ・タラ（という地名）を考え付いた中国人というのの心は黒い[16]

トクズ・タラというのは、カシュ・クンゲス両河の合流地域で、ここに道光年間にタランチが移住させられ、開墾と運河の開鑿にあたらされた。（佐口、前掲論文。三十頁）。この歌は、恐らくこの時移住させられた農民が歌った歌であろう。「タランチの俚謡」には、又、トクズ・タラへ移住させられた若者が、残してきた恋人への伝言を雲に託するという内容のものがある。ところで、イブラーギモヴァ女史の引用した句は、筆者の訳の第二句に当る。

原文の musulmānlar を「人々」と解するのは差し支えないが、一句を、下された運命は、何時かは必ず去って行くものだ、というように解釈することには、大いに疑問がある。女史が устранится と訳し、筆者が「至るのだ」としたのは、原文では barar であるが、動詞 bar- には、идти, ехать, двигаться, отправляться (Наджип, Э.Н., Уйгурско-русский словарь, Москва. 1968)、to go, to proceed, to leave, to come, to arrive (Jarring, G., An Eastern Turki-English Dialect Dictionary, Lund. 1964) 等の意味がある。従って、イブラーギモヴァ女史の訳に全く根拠が無いという訳ではないが、全体の調子、特に「泣き止まそうにも術はない。不幸が頭上に下されたのだ」という句と考え合せれば、下された運命というものは、逃れ難く、必ずやって来るものなのだ、だから泣くな、というペシミスティックな方向に理解することが妥当であろう。

このように、イブラーギモヴァ女史の引用は、その出典が誤っており、解釈にも問題がある。そして、『聖戦記』に見る限り、ビラールは真の楽天主義者などでは決してない。

おお、ナイチンゲールよ、今や悲しめ／紅い薔薇は終り、私の季節が来た。
春の緑の続く限り、悲しみは無いであろう／（しかし）秋の季節が来れば、春は無くなるであろう。
そして、春が過ぎれば秋が来／秋が過ぎれば、世界は薔薇園となるであろう。
すべて幸せが有れば、苦悩が加わる／（しかし）苦悩の足許には、幸せが絡まっている。[17]（六十頁）

これは、楽観と言うよりはむしろ諦観である。そして、彼がこのような諦観を持つに至ったのには、彼の民族の歴史が深く関係していると思われる。

例えばすべての清朝勢力を亡ぼし、ドゥンガンの反乱をも克服してイリに一応の平安が戻った時、ビラールは次のようにうたう。

おお、給仕よ。速く速く酒を持て／天の運りは、今日正しく経運っている。
この時をとらえて、酒を持て／信仰の杯になみなみとついで、
急げ、この幸せは永続せぬ／幸運を追い払って、苦悩が来たるであろう。
この苦悩が至る時には、幸せは去り／いかなる利益も与えず、後悔が来たる。(18)（一六二頁）

ビラールは急いで歓を尽そうとする。何故なら、彼は引き続いて、新しい苦悩――ロシアのイリ占領について語らねばならぬからだ。

ビラールは、人間世界のあらゆる出来事はすべて神の意志に出るという考えを、繰り返し、繰り返し述べている。彼にとって、歴史は神の意志が示現されて行く過程に外ならない。例えば、グルジャの蜂起の最初の指導者であり、『聖戦記』中でビラールが、最高の敬意と愛情を以て描いている人物、アブド・ラスル・ベク ʻAbd Rasul Bek とその義父であり協力者であったアフマッド・ハザーナチ・ベク Aḥmad Ḫazānačī Bek が、ウイグル人内部の権力闘争で暗殺された事件を語り終えたビラールは、次のように言う。先ず、アフマッドの暗殺について、

おお、兄弟たちよ。これらの事件を聞いて、誤ちを犯したと言ってはならぬ。むしろ汝らは、（それらの事件が）永遠の（神の）意志の必然であり、栄光と力のすべては、神の世界（に属するもの）であると言うべきである。（神は）何事を為されても、御自ら知り給う。すべての事柄が生じれば、それを神の意志と知ることが、（神

の奴隷にとっては必要である。[19]（三十頁）

更に、アブド・ラスル・ベクの暗殺を語った後には、次のようにうたう。

見よや何たる不誠実であろうか／これらの事件は、不正と圧制に満ちている。

そして、ムスリムに苦悩が到れば／彼は復活に際してあがめられる。

ムスリムが、この常なき世で不正に遇えば／（来世では）一つの不正の代りに、千の忠誠が有ろう。

学者たちは言った。現世は苦悩が本質／来世の宮殿は栄光が本質と。

これらの事件が人為によると言うな／すべての出来事は神の命による。

この事件に非難の言葉を向けるな／非難、呪い、無知の言葉を。[20]（六四―六五頁）

ビラールが楽天主義者であり、「より良き生活」への希望を持っていたとするなら、それは来世を待って初めて成就する類いのものであったと言わねばなるまい。

一切の現実を、神の摂理として受け入れようとうたうビラールが持っていたイスラムの信仰は、少くとも完全には正統的なものではなかった。予言者ムハンマッドとその四人の教友への頌辞において、ビラールはアリーについで、十二イマームに言及している。

又、かのイマームたち、ハサンとフサイン／アリーの美にとって眼の光り。

彼らへの恩寵は多くあった。その原因は／（大天使）ガブリエルが、彼らの揺籠をゆすったことである。

十二人のイマームは、皆アリーの一族にして／そのすべてはアリーの後裔である。

彼らの一族の出身の人々があれば／これなる詩人は御挨拶申し上げた。[21]（六頁）

ビラールが、アリーに先立つ三人のカリフ、アブー・バクル、ウマル、ウスマーンに対してと同様に、十二イマームに頌辞を奉げていることは、イスラム神学からすれば、極めて奇妙なことである。何故なら、スンナ派ならば、十二イマームに頌辞を奉げることは有り得ぬし、一方、シーア諸派は、ザイド派を除けば、アリー以前の三人のカリフをも簒奪者と見做しているからである。（嶋田襄平「イスラムの思想」『講座東洋思想』巻七、九一―九二頁）しかし、東トルキスタンにあっては、その住民がスンナ派に属していると言われるのに拘らず、例えば、アリーの子のフサインが、カルバラーの戦いで殺害されたことを記念するアーシューラーの祭典の如き、シーア的要素の混入が確認されている。（佐口透『十八―十九世紀東トルキスタン社会史研究』五五〇頁）。ビラールの信じていたイスラムも、こうしたシーア的教説を取り入れた、いわば一種土着化したイスラムであったと考えられる。

更に、『聖戦記』には、イスラムのヴェールを通して、イスラム化する以前のトルコ族の異教的宗教観念の残滓らしきものすら存在する。

反乱勢力による、バヤンダイ Bayanday 巴燕岱の占領の際、ビラールの兄ジャラール・ウッ・ディーン Calāl al-Dīn は、「我らが要塞に入らずして、誰が入るか／我らが闘わずして、誰が闘うか。……ジャラールは真先かけて殉教せん」[22]（七十―七一頁）と叫んで、その言葉通り、体に五発の弾を受けて戦死した。ビラールは兄の死を悼んで、ムハンマス muḫammas 体の詩（韻律はハザジュ hazac）を作ったが、その第一節

神は汝から天を作った。汝、わが兄弟は何処にありや。

汝と別れ、地獄の毒果を食うことがわが食事となった。
平安は去り、悲しみが来たり、苦悩がわが道連れとなった。
親しき兄弟は、我を打ち捨てて去った。わがはらからよ。
この故に、わが涙は腕にあふれ、血の如く流れた。[23]

その最後の第五節

わが兄弟（故）の悲しみは、アリフの如く（真直ぐであった）わが背を曲げしめた。
理性は撒き散らされ、悲しみが勝利し、我は一度に不幸になった。
指導者は逝き、腕は破れ、鳥の如き翼は飛び去った。
兄弟の思い出に、白頭のビラールは血涙をすすった。
我を打ち捨て、自らは逝きぬ。ジャラール・ウッ・ディーン、わが黒き眉。[24]（七二―七三頁）

「神は汝から天を作った」或いは、第四節に見える「神は兄弟から天を作った。わが信仰を裏切って」という表現は、死霊が天になるという観念を表しているように思える。ビラールは、「天」に falak 及び gardūn を用いているが、これらは、天なる神をも意味するウイグル語の tängri とは異なり、物質的な存在としての天、大空の意に解するべきであろう。又、「鳥の如き翼は飛び去った」は、死者の魂が鳥に変身するという観念を表している。バルトリドは、オルホン碑文で、「飛ぶ」を意味する動詞 uč- が、「死ぬ」の意味で用いられていることを指摘し、イスラム化のずっと後になっても、西方のトルコ族の間では、「鷹になった。šunqar boldi」という表現が、「死ん

だ」のシノニムに用いられていたと述べている。（バルトリド著作集、第五巻、三十頁）『聖戦記』は、この古代のトルコ民族の死霊観が、東方のウイグル人の間にもその痕跡を留めていたことを示している。

ムッラー・ビラールが『聖戦記』で語っている一八六四年の反乱の勃発から、一八七一年のロシアの占領に至る間のイリ地方の歴史は、清朝に対する「聖戦」の歴史であると同時に、反乱勢力内部での権力闘争の歴史でもあった。本稿に「聖戦記について」と題した以上、その詳細を紹介すべきではあるが、残された紙数は、最早それを許さない。そこでここでは、この「聖戦」と権力闘争に対するビラールの態度の紹介に止め、その外は他日に期したいと思う。

ビラールにとって、清朝との戦いは、その軍隊との戦闘は勿論のこと、漢人の商店の略奪や屯田の襲撃、更には、その「蟻の腰つき、薔薇の唇、月の面」をした娘たちを奴隷にすることまで含めて、正に字義通りの「聖戦」であった。彼は「偶像様 lat-ziza」の前でペコペコ頭を下げる「仏教徒 ahl-i būt」を極めて軽蔑的な調子で描き、同治帝を「呪われた同治奴 Tūng zī la'in」と呼び、伊犂将軍常清を、敗報を受ける度に玉座（とビラールは言っている）から大地に身を投げて、嘆き悲しむ頼りない人物として、又漢人の兵士たちを、恐怖の余り失禁する憶病者として描いている。実際の戦闘において、ムスリムの戦士たちがそうであったように、ビラールの描写にも容赦はない。例えば、恵遠城（伊犂本城。「聖戦記」では küräi と呼ばれている。〈mong. küriyen）に籠城した人々について

互いにつかみ合って、その肉を食い／美味いと言って、あばら肉を食った。

市場に出かけて、出会った者を捕え／女子供たちの血をすすった。

人肉を争って食い／雪を掘りおこして、自分の糞を食った。[25]（一三〇頁）

と、酸鼻極まる有様を描いている。しかし、この様な状態の中国人に対しても、ムスリムの戦士の聖戦に手かげんはない。一旦降伏を申し出た中国人たちが、約束を履行せぬことに立腹したムスリムたちは、恵遠城に攻め入る。

この数日間、大変激しい戦闘があった／中国人の血もて大地を染めた。

数人が要塞に火を放ち／煙が立ち昇って空で雲となった。

中国人は、まわりを見回して放心していた／自分の家に自ら火をかけた。

煙と炎が城市に満ち／城市は目に見えなくなった。

戦士たちは入って城市を征圧し／中国人たちを捕えると、確実に吊るし、

皮を剝いで殺した／首を切り、眼をえぐり、

中国人に遇えば、さっさと殺し／その妻子を嘆かせた。[26]（一三三頁）

光天氏の表現を借りるなら、ビラールの戦闘の描写には、「憤怒と仇恨の気焔」が満ち満ちている。この気焔を、いわゆる民族意識の表われと評価することも勿論可能であるが、その際には、ビラールにとっての民族とは、あくまでも「仏教の民 ahl-i būt」に対する「イスラムの民 ahl-i islām」のことである点を明記しておかねばならない。

異教徒に対するかかる強烈な敵意は、逆からこれを言えば、自らがムスリムであるという意識である。そして、その意識は、反乱勢力の内訌を記述する際には、イスラムの教えに忠実な指導者への共感、その反対者への嫌悪という形を取って現れる。

ビラールの伝える反乱の指導者の交代は実にめまぐるしい。最初の指導者は、イリの代理のハーキム・ベクであったアブド・ラスル・ベクであったが、先のハーキム、マズム・ハン Ma'zum Ḫān は監禁されていた恵遠城を脱出し、反乱に加わってスルタンとなる。彼は、アフマッド・ハン・ホージャ Aḥmad Ḫān Ḫvāca なる人物に命じて、先ずアブド・ラスルの義父、ついでアブド・ラスル自身を暗殺させる。しかし、彼も、他所から流れて来た、プーチ・マフムード Fūčī Maḥmūd なる、ポプラの木から大砲を作ったり（Fūčī 砲手という渾名はこれに由来すると思われる）、魔法の薬で不信者の体を金縛りにすることが出来ると称して、勢力を得た怪しげな人物の為に殺される。プーチは、直ちにシャムス・ウッ・ディーン・ハリーファ Šams al-Dīn Ḫalīfa に殺されるが、多くの有力者がプーチの手にかかって殺害されてしまった為、シェヴケット・アホン Šāvkät Āḫūn がスルタンに推される。が、やがて人心はアラー・ハン A'lā Ḫān に帰す。アラー・ハンは敵対するドゥンガンを破り、ドゥンガンとウイグルは和解するが、やがてロシア軍が侵入し、アラー・ハンはアルマ・アタへ連れ去られる。これら次々と有力となった者のうち、ビラールが最大の敬意を以て描くのは、先にも述べたように、アブド・ラスルであり、アラー・ハンがこれに次ぐ。ビラールによれば、彼らは、先ず人民に敬愛される支配者であった。アブド・ラスルについて、ビラールは

人民のすべては、アミール・アブド・ラスル・ベクの薔薇の如きかんばせと賢い知識を熱望し、彼が何を命令しても、心から受け入れたものであった。[27]（二五頁）

と、述べている、彼らは、ビラールがアラー・ハンについて言う如く、

シャリーアの実行に努力し／毎日、人民のことを配慮し、

貧乏人の方へ恵みの手を広げ／貧しい孤児に誠意の手を。[28]（一六二頁）

差し伸べたが故に、人民から敬愛されたのである。そして、彼らは、ムスリム同志の争いに極力反対した人物として描かれている。ビラールは、義父の暗殺の知らせを受けたアブド・ラスルの口から、

敵は我らを取り巻いている（というのに）／互いに殺し合って滅びるとは。

ムスリムがムスリムの血を流すなら／疑いなくこのユルトは、我らの手を離れるであろう。[29]（二九頁）

と、言わしめ、アラー・ハンについては、彼が敵対したドゥンガンに、誠意あふれる手紙に糧食までつけて送り、翻意を勧めたいきさつを語っている。そして、彼らが内訌に反対するのは、彼らが自らの死をも神の摂理として受け入れる程の敬虔なムスリムであったからということになっている。例えば、自分を暗殺する陰謀が有ることを知らされたアブド・ラスルは言う

マズム・ハン、アフマッド・ハン・そして我自ら／（皆）神の御言葉により、かく作られた。

我を殺すならば、（そのような）御言葉が有ろう／我殉教すれば、明日は（神の御許に）場所を見つけるに違いない。

神の御言葉は、わが証しである／神への信頼は、わが導きである。

誰か痴れ者が我らを殺しても／神の決定に私は満足だ。[30]（六一頁）

かかるビラールにとっての理想的支配者と全く正反対の人物として『聖戦記』に現れるのが、アフマッド・ハン・ホージャである。この悪魔的な人物は、アブド・ラスルとその義父の暗殺に直接手を下した犯人であり、プーチ

・マフムードが現れるや、マズム・ハンを棄てて彼に味方し、最後にはドゥンガンを味方につけて、ウイグル人と戦わせるという向背常ない人物で、『聖戦記』では、反乱勢力内部の様々な抗争の狂言回しの役を当てられている、従って、「ムスリムがムスリムと闘った。見よや、互いに戦い／イスラム教徒の頭から理性が去った」[31]（九一頁）とうたい内訌に反対するビラールの、アフマッド・ハンに対する態度は当然軽蔑的である。ビラールは、彼を中国人との戦いに際しては「危険な重荷を皆投げ捨て」て敗走する卑劣漢でありながら、「ムスリムを殺すために、このホージャムは／ムスリムの陣へ気取って進んだ」[32]（一五七頁）と皮肉っている。更に、彼がいかに、ムスリムの団結を破壊したかについては、マズム・ハンを殺害した彼とプーチ・マフムードの軍が、グルジャに入った時の有様を、

この軍隊は隠れ場所（として）城市に入り／死んだ兵士たちの財産を取り、
スルタン（マズム・ハンを指す）のオルダをも略奪し／すべての家財・財産を奪った。
この事件は世界に騒動をみなぎらせ／城市のうちに混乱を起した。
ムスリムのものを略奪し／心に敵意の種を播いた。[33]（九四頁）

と伝えている。正しからざるムスリムに対する、ビラールの非難は激しい。しかし、ビラールが見た現世では、勝利は常に不正義の側にあり、理想的支配者アブド・ラスルは卑劣漢アフマッド・ハンの兇刃に倒れ、アラー・ハンはロシアに連れ去られる。敢えて、天道は是か非かと問わぬ以上、ビラールは、先にも述べたように、一切を神の摂理として是認しつつ、すべての正義が実現される別の世界を待望するしかない。だが彼とても、現世を無意味だと

は考えているのではない。『聖戦記』の最後に言う。

すべての殉教者の魂は喜んだ／良い行ないを為せ。汝希望を見出すであろう。

著作にこれを、思い出として書き置いた／（その行ないの結実を）収穫する際には、報いは多いであろう。

すべて人がことを行えば、意味が無いということはない／その意味を知ることが、我らの玉座である。[34]（一七一頁）

人々の行ないの意味を闡明し、後世に伝えること、これこそビラールが自らに課した「良い行ない」であったのであり、現世で、彼が為し得る最高の行為（玉座）であると、ビラールは考えていたのである。

（本稿は、昭和四十七年度に提出した、「十九世紀後半のウィグル歴史文献並びにその著者たちについて」と題する修士論文の一部を訂正加筆したものである。）（京都大学大学院文学研究科博士課程）

注

(1) özüm ādamīlar faqīri edim/faqīr ne demäk dur ḥaqīri edim// avāildä yürdüm yamanlar bilä/ḫarābāt icrä cuvānlar bilä// ne eng̃limdä tün bar ne elkimdä ǵarr/ ḫudā ḫavfidin tapmayin hēč ḫabar// bu qïsmï ötüp ʻumrimiz nečä yïl/ḫalāyïq ara nečä ḫvār vä zalīl// valī qïldï ḥaqq ḫaṭṭ tonumaq ʻaṭā/ki avvalǵï ḥālim bolup dur rahā// bolup gāh gāh naẓm qïlmaq išim/muḥiblär bilǟ bazm qïlmaq išim// binā gāh yoluqtï ki bir nečä dūst/ bular dūsluqï bizgä erdi durūst//

(2) dar bayān-i ʻuǵr nāma. bu faqīr bi-bizǟʻat vä ḥaqīr bī-istiṭāʻat nāẓim özining türklikini vä dūstlarning sačilǵan sözlärni naẓm qāʻidasï bilä camʻ qïlïp qoymaqqa qïlǵan dalālatïnï iẓhār qïlmaqï

(3) bulardïn birisi ʻAlī nām edi/ qïlïp ʻuǵr-i bisyār bu qïsmï dedi// aya nāẓimi anglasang bar sözüm/ qarïndaš-din artuq sanga men özüm// Īlāning cihādïnï naẓm äyläsä-ng/ gulistānï naẓmïda bazm äyläsäng// cihān ṣafḥasida

qalur atïmïz/oqur ancumanlarda avlādïmïz// oqup rūḥïmïzġa du'ā äylägäy/du'āsïnï tängrim ravää ylägäy// ki bizdin bu qiṣṣa qalur yādigār/ ki yād nāma qalġay naẓm-ï abyāt ki rūḥï šahīdlärni šād äylängiz/cihādïnï tilim rūzigār// äylängiz//

(4) tola sözländi men bolup nā'ilāc/dedim men qïlay tängri bersä ravāc// dedim ḫūb bolur ay muḥibb bāḥirad/ qïlay mavlavī bizga qïlsa madad// tola ḫalq degändin ki men bïḥirad/ki čahrïm bu andīsadïn boldï zard//

(5) bu daftarnï avval iki üč ay 'Alī Bāy taqrīr qïlïp, sözini faqīr Mullā Bilāl Nāẓīm naṣr boyunca fitip, andïn farvica teggänčä naẓm qïlïp, ġazāt qïlġan musulmān-larning avlādlarïġa yād nāma qïlïp qoyduq. ġazāt dar mulk-i čīn aṭ qoyduq... tārīḫ bir ming iki yüz toqsan üčdä Īlā ḥisābïda pars yïlïda bu daftar tamāmïġa yetkän.

(6) išitkän ḫalāyïq malāl olmasun

(7) tamām dardmandī išitkäy munï/közidin aqïzġay cagar qanïnï// birövning bolup dur atasï šahīd/bolup ba'żalarning balasï šahīd// biröv ayrïlïp dur qarïndašïdïn/ ki cāndïn 'azīzraq kökäldäšidin// išitsä dalī tīz yara bolur/ ne yara bolup bälkä pāra bolur//tażrru' qïlïšïp du'ā äylägäy/du'āsïnï tängrim ravā äylägäy// ki rūḥ-ï šahīdān

hämä šād olur/du'ā qïlġučï ġammdïn āzād olur//

(8) Īlā qal'asïning suḫunvarlarï/suḫunvar ne dur nokta farvarlarï// bu dur kim qïlïšqan rivāyātlarï/macālisdä qïlġan ḥikāyātlarï// bu nāẓīm yürüp söz durrïnï tizip/ ki aldï ušul dam varaqqa sïzïp//

(9) ḫiradmandlardïn bu yanglïġ maqāl/ki men anglap erdim anï bīmalāl//

(10) yürüp bu Bilāl bu cihād ičrä köp/fitip daftarï ičrä aldï körüp//

(11) bu yanglïġ dedi rāvī-yi nuktadān/ bu sözlärni daftarda qïldïm bayān//

(12) ne vicha edi bu cihādġa sabab/anï uqturur men bayātïmda dep//

(13) al-qiṣṣa.Īlā šahrï qaysï ḫāndïn qayu ḫānġa qalïp dur. qaysï ḫānning zamānasïda bu Ġulca abād bolup qaysï ḫānning vaqtïda bozulup dur. aning bayān.

(14) ki rāvī rivāyatda mundaġ dedi/Īlā šahrï ḥiccāzġa ṭābi' edi// ki andïn keyin ötti dep nečä ḫān/baqā sarïġa barča bolmïš ravān// Īlāġa bolup ba'dah qūngtācī šāh/ nečä yïl yürüp čūn bu häm tuttï rāh// ki andïn Umūr-īṣanāġa qalïp/munï tutqalï Ḫān Ḫōcamlar kelip// Īlā šahrïda altä yerdä soquš/Umūrīṣanā birlä qïlmïš uruš//

bular häm cihāndïn ketip dur teḫi/hämä bir bir arqa ötüp dur teḫi// ki Čän-lūng degän ḫān ẓamāna yetip/ Īlā šahrïġa nečä köčmän čïqïp/Kūčār birlä Āqsū Šāyār Bāydïn/ki Yārkand Kāšqar Ḫotan sarïdïn/köčüp barča ādam Īlāġa kelip/ki ābād qïlïp dur zamīnni tärip//o damdïn bu damġa ki yüz nečä yïl/ki ḫāqānġa ḫizmat qïlïp munča yïl// qïlïp kufrī mu'minġa ẓulm sitam/alïp arfa boġday qonaq u diram// ki ḥaddïn ašïp kufrīlär ẓulm basī/ḫiṭāydïn cafālar körüp ḫalq basī// mudām nukra zarlar alïp bayïdïn/ki tartïp alïp baylar tayïdïn// faqīrlär ölümni körüp yaḫšïraq/sipālar faqīrni urup köp tayaq// ḫiṭāylar bu qïsmïda äyläp sitam/balasïnï satïp alurlar diram// čïdalmay bu kifārlar ẓulmġa/ra'āyā čïdalmay tayaq ġuldïġa// ḥuṣūlġa satïp yaḫšï farzandnï/ki cāndïn 'azīzraq cagar bandnï// čïdalmay ra'īyat ḫiṭāy ẓulmïġa/yaġï boldï āḫïr alïp zōrïġa

(15) gadādek bolup dur ne ḫōš baylar/gadālar minär tīzräv ṭaylar// ičalmay gadā bādiyān čayïnï/tapalmay āšïġa zaġīr mayïnï/ičärlär bu künlärdä aṭ bašï čay/išäk minmägänlär minär boldï ṭay// bolup faqrī baylar balasï tola/gadānïng bu kündä kalasï tola// gadālar ičip sutnï qaymaq yedi/'azīzlär mudām nānï-yï qaq yedi// dirïġā

dirïġā ṣafā qalmadï/qarïndaš ičindä vafā qalmadï// yigitlär ḫatundek kiyär basmanï/uluġlar beligä taqar tasmanï// ki bad aṣlï bad ẕāt boldï 'azīz/čū köp häm mu köp yürdi ahlï tamyïz//

(16) Toquz-tara Toquz-tara ilning damï bašnï yarar/ yïġlamanglar musulmānlar nasībasïnï tüškän barar// Toquz-tara tara dedür tara emäs tala ikän/yïġlamasqa 'ilāc yoq bašqa tüškän balā ikän// havā tutulup čïqtï häm tuman bilän manan/tüšümġa kirip qalïp dur häm atamï bilä anam// Toquz-tara dedür anï toqay emäs tüptüz tala/Toquz-taranï čïqarġan ḫiṭāy degän köngüli qara//

『聖戦記』に比較して、タランチの歌にはより多くの現代イリ方言の要素が見られる。しかし、ここでは韻合上、チャガタイ語のトランスクリプションに従っている。

(17) aya 'andalīb emdi äylängäfġān/qïzïl gul ketip yetti faṣl-ï ḫizān// davāmat bahār sabza zār olmaġy/ḫizān faṣl yetsä bahār olmaġay// ki ārī bahar ötsä kelgäy ḫizān/ḫizān ötsä 'ālam bolur gulistān//ki här davlatï bolsa miḥnat qatïš/ki miḥnat ayaġġa davlat čatïšy//

(18) aya muġbača tīz tīz may tutung/falak davrï bu kündä čörüldi ong// tutung may bu damnï ġanīmat bilip/

ki cāmï färäḥgä labālab alïp// bolu͡ng tïz bu davlat mu turmas midām/ki miḥnat mu yetkäy sürüp tïz ḫirām// bu miḥnat yetiškändä davlat ketär/ki hēč sūd bermäs fašïmān yetär//

(19) äy barādarlar bu vāqi'ātlarnï išitip demä͡nglär ki ḫaṭā qïlïp dur. bälkä degäy sizlär ki irāda-yï azalïni͡ng taqāżāsï dur ki cumla-yï mulk malkūt allāh tia'ālänï͡ng 'ālamï dur. ne qïlsa özi bilür. här nav' iš vaqū'ġa kelsä anï allāh ta'ālänï͡ng irādasï bilmäk bändägä lāzïm dur.

(20) körü͡nglär nečük bïvafālïġ durur/bu išlär sitam pur cafālïġ durur//ki ārï musulmānġa yetsä alam/anï äylämiš ḥašrïda muḥtaram// ki mu'mïn bu fānïdä tartsa cafā/ki bar bir cafā orunïġa ming vafā// 'ulamā dedi fānï miḥnat sirïšt/ki 'uqbā sarayï sa'ādat sirïšt// demä͡ng bu išlärni ḫalqdïn erür/ki här vāqi'a amr ḫaqqdïn erür// uzatma bu išġa malāmat tilin/ne ṭa'na ne la'na cahālat tilin

(21) yenä ol imāmān Ḥasan u Ḥusayn/'Alï zahradïġa edi nūr-ï 'ayn// bular fażlïaġ bas erür bu dalïl/ki tiprätti kahbārasïn Cabra'ïl//on iki imām barča/āl-ï 'Alï/tamāmasï dur ẕurrïyāt-ï 'Alï// bular ālïdïn bolsa az ḫāṣṣ 'āmm bu nāẓim dedi al-du'ā al-salām

(22) ki biz kirmäsäk qal'aġa kim kirür/ki biz qïlmasaq cangnï kimlär qïlur// bolayïn burunraq šahïdi Calāl//

(23) ḫudā qïldï falak sendin qayan dur sen qarïndašïm/seni͡ngdin ayrïlïp boldï zahir zaqqūm ičär āšïm/farāġat ketti ġamm yetti sitamlar boldï yoldašïm/qarïndaš mihribān ketti meni tašlap kökäldäšim/bu vachïdïn töküldi qanġa āġūšta bolup yašïm/

(24) qarïndašïm ġammï qïldï alifdek qāmatïmnï dāl/'aqïl sačïldï ġamm bastï bolup men bir yolï bad ḥāl/sarvar ketti qanat sïndï yulundï murġ yanglïġ bāl/qarïndaš yādïda ḫūnābalar yuttï Bilālï zāl/özi ketti meni tašlap Calāl al-dïn qara qašïm/

(25) tutup bir birini gūšïnï yedi/ki tatlïġ iḳän dep töšini yedi// guẕarġa čïqïp učraġannï tutup/ḫatun balalarnï͡ng qanïnï yutup// ki ādam gūšïnï talašïp yedi/özin foqïnï qarnï ačïp yedi//

(26) bu künlärdä boldï 'acab saḫta cang/ḫiṭāy qanï ġabrānï čūnān berdi rang// ki bu nečä tan qal'aġa qoydï ot/tütün čïqtï āsmānġa boldï buruṭ// ḫiṭāy qaldï ḥayratda här yan baqïp/özini͡ng öyigä özi ot yaqïp//tütün birlä otlar šähärgä tolup/ki közdin šähär bälkä ġāib bolup// kirip ġāzï erlär šähärni basïp/ḫiṭāylarnï tutqan hamānā

asïp// halāk äylädi teräsini soyup/kesip bašïnï közlärini oyup// ḫiṭāy učrasa tïz äylädi halāk/ki farzand zanïnï qïlïp dardnāk//

(27) ra'āyālarnïng cumlasï Amïr 'Abd Rasul Begning guldek yüzigä vä 'aqlï dānišiġa muštāq bolup, här ḥukmï ki qïlsa cān dili birlä qabūl qïlur erdi.

(28) šarï'at ravāçïġa kūšïš etip/ki här kün ra'āyānï pursïš etip// ačïp faqrï sarï saḫā elkini yatïm/bïnavāġa vafā elkini//

(29) ki dūšman här aṭrāfïmïzda turup/tügänür ikän bir birin öltürüp// ki mu'min musulmām qanïnï tökär/ki šakk yoq bu yurt elkimizdin ketär//

(30) Ma'ẕum Ḫān Aḥmad Ḫān birlä özüm/kalāmï ḫudā birlä qïlġan qïsm// meni öltürür bolsa tutqay kalām/ki bolsam šahïd tangla tafqum maqām// kalāmï ḫudāvand guvāhïm durur/tavakkul mening rahnumāyïm durur// ki öltürsä bizni qayu nāsazā/ḫudānïng qażāsïġa berdim riżā//

(31) ki mu'mïn mu'mïn bilä qïldï cang// körüng bir biri birlä qïldï soquš/ki islāmïlär bašïdïn ketti ḫūš//

(32) ki mu'mïn öltürmäk üčün bu ḫōcām/musulmān ṣäffigä sürüp ḫirām//

(33) panāgāh bu laškar šähärgä kelip/ki ölgän sipālar mālïnï alïp// ki sulṭānnïng häm ordasïnï bulap/tamām māl amvāllarïnï talap// cihānġa tolup mācarā ġulġula šähärning ičigä salïp zalzala//ki ašyā-yï mu'mïnni ġārat qïlïp/'adāvat uruġïnï dilgä terip//

(34) barča šahïd rūḫï bolup dur ki šād/yaḫšï 'amal äylä tapar sen murād// ḫaṭṭġa fitip qoydï munï yādigār/dahra ara qalġusï köp rūzigār// här kiš iiš qïlsa emäs ma'nāsïz/ ma'nāsïnï bilgüsi dur bātïmïz//